

佐伯市制四十五年の歩み (三)

平 川

繁

(会員・佐伯市中村東町)

興人の要求に対して、矢野市長は金井滋直社長あてに昭和二十六年二月十九日付で、次のように回答した。

「昭和二十六年二月十四日付の右のことについては、二月十五日、緊急市議会全員協議会を開き、希望条件の各件各項について検討した。このあと直ちに本会議を開いて、希望条件を全面的に承認することを決議した。

さらに翌十六日、民間側有志で構成している誘致委員会を開き、ここでも希望条件を全面的に承認いたしました。希望条件について回答いたします。」(以下略)

各項についてももちろん「協力します」「責任を持って約束します」の羅列であった。これは全く前記のパーソナル中將の全面降伏的なものだった。

なぜこんな売市的な受け入れを契約したのか。それは目前に迫った市長・市議会議員の改選に対して、選挙が

有利になるという思惑が働いたからだだった。

しかも、土地の払い下げ価格にいたっては、あの膨大な、当時としては全国的にもまれな四十万坪(百三十二万平方呎)を越す臨海工業地を、市民が予想だにしなかった坪(三・三平方呎)五十坪、鶴谷濃霞の市街に近い所でさえ、坪八十円くらいという破格の廉価で一括売却をしてしまった。

あんな誤った軍用地処分をしなかったら、あそこには多くの工場が誘致出来、戦後の佐伯はもっと変わった街になっていえると思えば、後悔先に立たずとはいいながら正に佐伯百年の大計を誤ったものとして、惜しみてもあまりあることである。

こうして、一企業の所有となった土地には、いかに遊休地があらうといたし方なく、工場の誘致は行き詰まり

の現状である。興人工場が完成した数年後に、濃霞山を隔てた元防備隊跡地（興人の土地ではない）に小野田セメントが、肥料工場の建設を申し込んできたが、それさえ、契約の十一項を盾に、興人が強く反対して実現をみなかった。自分の土地に建てるのがまよならなくなっていた。戦後は国からの財政補助もなく、どここの自治体も苦難の時代だった。それに興人誘致による赤字は三千八百万円にも達し、いまでいえば財政再建団体の様相だった。

四、次々に大事業（以下敬称略）



出納 5代目市長



池田 6代目市長



大鶴 7代目市長



佐々木 8代目市長

昭和二十八年、市町村合併促進法が制定され、これを受けて三十年三月、佐伯市に木立・下堅田・青山の三村が編入して現在に至っている。

三十年四月の市長選挙は三選を目指す矢野と、初代

教育長だった出納菊二郎との争い。市を二分したが、四千余票の大差で出納が当選した。以来三十四年と三十八年の選挙も対抗馬がなく、三期十二年にわたって出納市政が続いた。

この間、財政の立て直しに力を注ぎ、消費的経費を節約し、自己の報酬さえ辞退したこともある。半面、教育施設の充実、自衛隊の協力を得ての野球場の建設、三十九年の市庁舎の新築移転など、事業面には懸命の努力をした。

そのほか、港湾の整備、道路の改修、危険校舎の解消幹線道路沿いの河川埋め立てなど、その功績は大きかった。四十一年の大分国体には高校野球とレスリング会場となり、真新しい球場に、天皇・皇后両陛下の行幸を仰ぎ、レスリング会場の佐伯鶴城高体育館には、秩父宮妃殿下のご臨席もあって、大成功を博した。

市始まって以来の大事業の連続で、赤字解消は出来なかったが、その誠実な人柄と業績は、多くの市民の支持を得た。この時、四千八百万円の赤字はあったが、うち三千万円は将来の土地造成で、残りの千八百万円は、当時造成中の土地で解消する見込みがついていた。市民か

ら惜しまれながら、三期十二年を務めて、市長の座を降りたのは四十二年四月だった。

これを受けて市長選挙は、池田利明と金田豊の一騎打ちとなり、池田が当選した。市制施行三十周年の記念式典と総工費三億九千万円を投じて完工した文化会館落成の式典が挙げられたのが四十六年十一月十九日だった。

以来、池田市政は三期十二年間続き、五十四年四月の改選で大鶴文雄が当選した。

大鶴市長は、古くなった佐伯小学校の改築をはじめ、図書館の建設や、また毛利家と度重なる交渉の末、佐伯のシンボルである城山を譲り受けた。昨年から懸案の下水道工事に取りかかったが、不幸にして竣工を見ず急逝したのは、惜しみても余りある事であった。

そうして、六十一年八月末の選挙で、佐々木博生氏が当選して、佐伯市第八代目の市長として、現在に至っている。

佐々木市長の抱負は、左の通りである。

① 物と心が豊かで、外部から訪れる人たちが、佐

伯に住みたいと思わせるような町づくりを進めたい

現在施行中の下水道事業や、花と緑のある町（歴史

と文学）づくり、旧市内の河川整備を促進したい。産業が発展し、文化や歴史の薫り高い佐伯をめざしたい。

② 短期・長期の展望に立ち、不況に対して足腰の強い経済構造にしたい。

ア 地場企業の育成（興人・臼杵鉄工・二平合板等）

イ 商店街の活性化

ウ 農林漁業の振興（一村一品・マリノポリス構想）

エ 企業誘致

オ 地元産品の流通や市場開拓、一・五次産業の振興

③ 和と協調を大切にして、次の施策を押し進めたい。

ア 国道388線の佐伯第二大橋の早期着工

イ 高規格道路の海岸線計画決定を促す運動

ウ 物流基地としての佐伯港の利用計画樹立と実施

エ 京阪神と結ぶ広域観光路線ともなる八幡浜フェリー

ーの早期就航実現

オ 県南のリアス式海岸や鍾乳洞・溪谷などを生かした広域観光地づくり

た広域観光地づくり

以上